

REST TIME

「歓迎 新規参加者のみなさん」 ACT. 15

NOTE !

※今回の締切りは8月15日(必着)です。

※現在、大佐に達したキャラのための「エキスパートルール」について検討が開始されています。「大佐に達したら名誉の戦死を賜る」などというジョークともつかない案も出ていますが、「こんなのどうだい」みたいなのがありましたら、お恵みを拝借したいと思います。実際に「大佐戦死者」が出る前(苦笑)に、どうぞ。

突発企画 今月の教育的指導

キャラ名について。GG参加の古参の方は既にご承知のことと存じますが、どう考えても人名とは取れないものは無条件で戦死、あるいは程度のひどいものは即刻無条件で失格処分にいたしますので、お気をつけください。

第三国の報道

○1944年7月初頭の「東亜日報」：このところ、太平洋戦線においてはまったく大きな動きが認められない。大陸からの米軍B-29による西日本爆撃はそれなりの効果を収めているものと推察されるが、その損害もまた大きく、積極的行動に移れないのが実情である。連合国側の作戦としては、まずドイツの息の根を止め、それからゆっくり日本を料理するつもりと思われる。それまでは通商破壊戦でじりじり追い詰めるのであろう。

○同時期の「ディ・ドイツラント」：連合国軍は我が帝国方面への攻撃態勢を日増しに増強しつつ、パリ方面に進撃中である。しかし我々が恐れる必要はどこにもない。今や優秀なるゲルマン民族は、アングロサクソン人たちに報復する鉄槌を手に入れたのである。これをもってすれば3年前に無期延期となつたイギリス本土上陸作戦を、瞬時のうちに達成することもまた夢ではなくなるであろう。

Q & A

Q1：多座機のキャラが任務拒否する場合、参加料金はどういう計算になりますか。

A1：その前の回の機体を基準にして、一機ごとに計算して下さい。撃墜重傷なんかで全員拒否だといいんですが、一部だけの場合は……一人一機で計算してください。今後そうします。そういうケースが未だやたらに出ないうちに、そう決めときます。

Q2：時期的に、6～7月だと米軍は「グアム・テニアン」戦のはずだと思うのですが、何で台湾へ行くんですか？早くケリをつけるため？それともイザベリアの装備が日本に流入しないようにするため？

A2：企業秘密です。……まあ、当たらずとも遠からずってことですか。

Q3：イエールはいつまで「空軍」で空母を保有し続けるんでしょうか？

A3：艦載機とその部隊、つまり「お荷物」は空軍、ハコは海軍の扱いということです。

Q4：何で未着工のはずの空母が来るんです？

A4：……細かいことは言いつこなし。ね？(なアにが……)

——永平寺九頭竜城 時事小放談——

▼思わぬところに落とし穴は存在するもので、この「時事小放談」の題名もその一つであった。誤植されたまま数か月も気付かぬとは、我ながら汗顏の至りである。▼時に、ここに頭の菊地である。彼は今、こんな事をやっているが、それが故に右翼と思われることが多い。▼しかしそれは、違うと思う。彼は苦笑するのみで本心を明かさぬが、単なる歴史の観察者に過ぎないのではないか。不運なことに、それが我々日本人にとって「嫌」な部分の歴史であるがゆえに、不当なレッテルを貼られ易いのだろう。本心を積極的にアピールしない菊地本人にも非はある。▼考えてもみ給え。零戦と、備前長船と、どれだけの違いがあるだろう。どちらも単なる「武具」にすぎないではないか。本質を無視し、上っ面だけで物事を論ずるほど無意味なことはない。▼WWⅡの「結果」についても同じである。

日本は確かに敗戦したのである。それを「終戦」と言い替えたり、「勝った」と言つたりするのはなんとおぞましいことか。駒大の図書館には「大東亜戦争必勝論」なる本が置かれているが、この書に至っては論外である。▼経済的に行き詰まり、敵に首都を押さえられ、政治的に従属するようになって、なお「敗戦」を認めぬとは、愚かである以前に卑怯ですらある。多分わかっているのだとは思いたいが、それでも依怙地に「終戦」という語にしがみつく者の何と多いことか。▼名言と詐術は紙一重である。諸君の身の回りに、他にもこうした「言葉の詐術」はないだろうか。是非探してみて欲しい。

前回のクイズの答え。

- ① 4 1 1 0 7 4。「74式戦車！」と言つてはしゃぐのは、多分菊地ぐらい。
- ② 今回はこれがヒッカケ。「全部」なんです。前例によってそれ以外はバツです。
- ③ ii。会員募集コーナーがないから、スタッフをつめたり、参加者を集めたり出来ない。
- ④ i。これも何も考える必要なし。
- ⑤ ii。世の中ナメてかかるとしか思えませんナ。

今回の当選者は、愛知県の井村和正さんでした。

公開質問状

Q1：敵（イエール）のパイロットについて。シャルル・ホルストをたたき落とした敵傭兵のT. B. マクガイア少佐というの、もしかして「アメリカ陸軍航空隊第5航空軍第475戦闘航空群第431戦闘飛行隊長トマス・B・マクガイア少佐」と同一人物なんでしょうか？もしそうなら勝ち目はありませんよね……。（神奈川県・吉楽征二）

③はい、正宗！

A1：マクガイアはうちのです。名前をパクっただけです。実在人物には関係ないですが、先日少佐に昇進した途端、半分以上故意に（責任者当人がそう言った）戦死してしまいました。……それも実物と同じ死に方で。（兵庫県・正宗征二）

A — Strike 時代の背景

☆日本機の命名法（海軍篇）

日本機の命名法は、ある意味で一概に単純である。しかし海軍機は途中（昭和18年）で大幅に変更されたため、若干ややこしくなっている。空技の機体リストで「試」ナンバーをふっていたのは、そのための次善策的処置である。

詳しく説明すると、まず、昭和18年までは紀元（日本書紀の神武天皇即位を基準に計算する）の下二桁を制式名として命名していた。制式採用が決定された年のものを使う。

「零式艦上戦闘機」は昭和15年（紀元2600年）に制式採用されたため。「九九式艦上爆撃機」も同様に、昭和14年（紀元2599年）に制式採用されたからだった。そして、いわゆる「愛称」は付けられないのが普通だった。

昭和18年、方法が変わった。紀元を使用した命名法を廃止し、新たに愛称を制式名にしたのである。これは、同一の機体をまったく別の任務に転用する際の便宜を図ったものと思われる。これは推察にすぎないが、実際に「彗星」は艦爆として採用されるよりも偵察機として採用される方が早かったのである。「月光」も戦闘機としてより偵察機として採用される方が早かった。まして当時から、日本軍は戦力の統合化を考えていたことでもある。同じ器ができるだけ多くの目的に使えば、こんなに効率のいい話はない。

従って、昭和18年以降に制式採用された機体には、「〇式」というナンバーは付かないのが正しい。

共通する点は、改良型の番号（一一型、五二型など）である。これは第一位がエンジンの改修番号、第二位が機体設計の改修番号になる。決して同じ一つの数字ではないから、読むときは例えば「一一型」なら「じゅういちがた」ではなく、「いちいち型」と言うのが正しい。

試作機の名称は、少々異なった基準でつけられる。こちらは敗戦まで変更はなかった。

元号を使うのである。試作指示が出された年を用いる。従って、昭和12年に試作指示が出された零式戦の採用前の名称は「十二試艦上戦闘機」と言った。

ややこしくなるのを承知で話を進める。実は海軍には、更にもう一つの命名法がある。試作、制式を問わず共通のものなので、こちらが国際的に通用する「正式」な名称となる。

「機体リスト」にもあるような、アルファベット二つとアラビア数字二つを組み合わせたものがそれである。

まず最初の文字。Aが艦載戦闘機。Bが雷撃機。Dが艦載爆撃機。Jが局地戦闘機（迎撃機）……と言うような意味を持つ。

二つ目は数字で、これは正式採用の順番である。

三つ目は、メーカーの略号になる。愛知のA、三菱のM、中島のN、九州（旧 渡辺）のW、横須賀空技廠のYといったあたりが主だったところだろう。

四つ目は、その型の開発順序を表す。

この方法で行くと、「A 6 M 5（零式戦の五二型）」は「6番目の艦載戦闘機で三菱製、機体は5番目、エンジンは2番目の改良型」ということになる。

皮肉なことに、こちらはアメリカ海軍機の命名法に酷似したものであった。

(文責・菊地)

Voice of 参加者

④「（前略）公開質問状というのは、なかなか興味深い試みだと思います。初めは、あまり上手くいかないかも知れませんが」
(神奈川県・遠藤誠)

⑤だったら参加してね。

⑥「一応、『二次大戦篇』は長くてもあと一年ですよね？（中略）半年ほど第一次中東戦争期をやってから、朝鮮戦争期へ、ということにしては？」
(福島県・森田欽也)

⑦「就職したらおしまい」というのが大前提としてあるので、留年分を計算外にしたらあと3年半なわけです。まあ、できれば修士も取りたいので、5年半くらいはやるかもしれません。どっち転んでも、そうそうあれこれは出来なくなってるんですよね。

別に穴埋めって訳じやないけれど

⑧森田さんからこんなエピソードが届きました。

⑨日本初の装甲飛行甲板空母「大鳳」の、爆沈事件はエセックス級と対比して語られるべきでしょう。

それから、こんな話があります。

「小沢長官は、部隊を前線に引っ張って行きました。

湾内に艦隊を入れたところ、湾が狭くて離着艦訓練ができません。湾外に出ようとすると、潜水艦の攻撃を受けて出られません。対潜部隊を出そうとしたら、着艦に失敗しました。とうとう『飛ぶな』という命令まで出てしまいました。」

ひどいものです。

⑩まったく同感。

「空技廠サマーツアー 9月1日」のお知らせ

8月31日の横田基地オープンハウスを見物することを計画中です。参加希望の方は8月25日までに電話か速達でお知らせ下さい。身分証明になるもの／カメラ持参は必須要件です。「写るんです」でも構いませんが、130程度の望遠レンズはあった方がいいでしょう。あらゆる意味での混雑が予想されるので、身軽な服装で来て下さい。日程の詳細は、参加希望者のみに後日お知らせします。

MACの大型機以外にも、16や15あたりは楽に撮れると思われます。例の湾岸戦争の後ですから、海軍機も撮れるかもしれません。保証は出来ませんが。

なお、私どもの家は狭いので遠来の方をお泊めすることが出来ません。宿については夜行を利用するなどして、何とか工夫して下さい。今年は9月1日が日曜なので、割と楽に日程が組めるはずですよ。夕方にはお開きにしますから、日帰りも可能でしょう。

PBM互助会（？）

今回は、ウチでイザベリアの表紙も担当して下さっている井村 和正 氏の、「アドラーク」を。二人ほどもう参加してますけどね。

これはウチと同じく二次大戦物の空戦PBMです。一時期隆盛を誇っていた、知る人ぞ知る現代空戦PBM、「テイクオフ」をホーフツとさせる編成で、ウチなんかより遙かにしっかりしたリプレイを毎回出しています。月刊ペースで、毎月上旬に結果が出ます。なお、こちらはオプションでエンジンの交換までできます。

時代は1942年前後。舞台は欧洲全域に渡ります。一時期アフリカ戦線をやりましたが、このところはまたドーバーに戻ったようです。

ASにあき足らない方には、是非参加をお勧めします。損した気分にはならないでしょう。連絡先は

です。

なお、ここは現代戦のも一緒にやっていて、「アドラー」に参加しているとある程度割引がきくようになっています。そういう意味でも結構おトクですよ。

ふろむ・えでたー

今年の12月8日で、太平洋開戦から50周年になります。恐らく今後これ関係の特番、映画の類が集中豪雨的に放映されるはずですから、皆さん新聞等のテレビ欄には充分気を付けましょう。数見れば、「駄作」「凡作」「秀作」の見分けが付くようになりますから。

それはそうと、現在の社会情勢を「太平洋開戦前夜」に例える論説が目につくようになってきています。この休み中に、皆さん方でも「WWⅡ」の歴史的意義と、「なぜ開戦に到ったのか」についてゆっくり考えてみてはいかがでしょうか。一つの物の考え方の指標が出来上がるはずです。その点に関してこの場では特に書きませんが、私信などではなるべく対応していくつもりです。ご意見など待ってます。……ほら、タマにや我々が「単なる戦争オタク」でなくって、「アマチュア歴史家」だってことを見せておかないと、何かまずいでしょ？「AS」だって、「歴史のIF」を追及する意味もあってやってるんだし。

「B lowers」関係の告知

うーん、もしかすると8月半ばに第3号が出るかも知れません。多少増ページしました。お代は300円、郵送料で別に175円いただきます。ご希望の方は、今回参加時にでも、代金を同封して下さい。

編C後記

菊：行ってやる行ってやる。今年は横田に行ってやる！……というわけで、よろしく。ちなみに空技からは、代表で私だけ行きます。

岬：キリンレモンもいいが、やっぱり「通」は三ツ矢サイダー。わかるか？
…ところで、イコリーナさんのフルネームが「イコリーナ・エッチーノ」であることが判明。この横幅に秘められた私のショックが、諸君に理解できるかえ！？

香：セーちゃん、半日でいいから帰ってきて。お願ひ。

宇：最近、提督は疲れてるみたいです。聞けば、無臭アンメルツとQPコーワゴールドの世話になってるみたいだし。皆さん、妙策があつたら教えてあげて下さいね♡

榛名とはるな

本居こじ・作

ACT. 6 The Recovery. (Sec. 2)

10分としないうちに、永野は来た。ガルグレー／白に塗られているS-2Eトラッカーである。翼下のパイロンにロケット弾を満載している。爆弾倉にも積めるだけの爆弾が積んであるはずだ。

ピストンエンジン搭載機特有の、湿った厚みのある爆音を曳きながら、S-2はゆったりと「大雪丸」の後方から近づいてきた。

「——！」

榛名は永野の意図を悟ったが、時すでに遅い。双発の対潜哨戒機は翼端をマックにひっかけそうなほどの低空で、「大雪丸」の上空を航過していった。操縦している永野の顔が、船上の榛名からもくつきりと見てとれる。とつさに密閉式のウイングの床に身を投げ出し口を開いて耳を押さえていた榛名は、次の瞬間には無線当番のマイクに飛びついた。

F-15J上のはるなは、すでにレーダーに「大雪丸」からのハリアーを捕らえていた。女子部の他の三機も同様だったが、加賀たちの乗るF-4Eはまだだった。ただ今回はミサイルを積んでいないので、さほど意味のあることでもなかった。すでに自分たちが発見されていることは全員が知っていた。逆探知装置が計器盤の隅の赤いLEDを灯していたからだ。あと5分もしないうちに空戦に入るだろう。——ダイヤモンド編隊のF-15の輪の中にいたF-4が、軽く機体を揺すった。目標をレーダーに捕らえた合図である。はるなは自分のレーダーを再確認した。敵は6機。まるで相手にならないだろう。

「大雪丸」のハリアー隊は、レーダーレンジぎりぎりのところではるなたちを捕らえていた。隊長の森は相當に辛い空戦になりそうだ、とすぐに見てとった。F-15相手にハリアーではまったく勝ち目がない。数からいっておよそ2対1、それでも5分ももてば上できに超がつくだろう。本来ハリアーは戦闘機ではなく、対地攻撃機なのだから。

——正攻法では勝てない。

森は思った。第一、艦隊からのSAMによる漸減効果を期待できないのが痛い。それでもF-15とは！A-4程度なら、まだ歯向かうこともできよう。

そう思っているうちに、5つの黒点が彼女の視界に現われてきた。彼女はスッパリ諦めて、無線の送話スイッチを入れた。

「全機、散って！」

同時に相手の機影も、急速に大きさを増しながら大きく散開した。そして、上空から降ってきた。

榛名は早速、上空で旋回しはじめた永野に説教をたれた。しかし永野の方は彼女に声をかけられているというだけで、頭が一杯になっていた。内容はどうでもよかった。恋は賢者をも盲目にするという。まったくである。

榛名はすぐ説教を諦めると、今度は追い払いにかかった。今度は短くすんだ。

「男子部の艦隊が寄って来てるから、追い払って」

「はい、栗田センパイ♡！」

急に回転を早められたエンジンの吐き出す黒煙を曳いて、永野のS-2はあつという間に去っていった。すぐに榛名はハリアー隊の無残な空戦結果を告げられ、これが訓練であることを知らせるためにコネクターを切り替えた。

「何なの、一体！」はるなはF-15の機内で呆れ果てていた。「いくらハリアーっても弱すぎるんじゃない!?」

実際、森たちは弱かった。男子部のマークがついているF-4に向かって、いつもペアを組んでいる阿蘿とかかっていった森だったが、たった2分で二人とも六時方向を押さえられてしまったのだ。それでも長かった方で、他のものなどは大概一分かそこらで「撃墜」されてしまっていたのだった。

「ハル、こら勝負になっとらんわ」長門が言った。「バーナー無しでやらなアカンのとちやうか？」

「かもね……」はるなは頭が痛くなる思いだった。

「かもねじやないわよ」扶桑が口をはさむ。「ハリアー相手にF-4とF-15が全力出してどうしようっての」

同じ時、森たち「大雪丸」艦載ハリアー隊も別の空域で編隊を組み直していた。森はある一つの手を思いついていた。ハリアーにしかできない技だった。仲間に一通り手順を教えると、彼女は自分からリターンマッチをリクエストした。はるなはもちろんOKした。彼女はその時までに自編隊にアフターバーナーを使わないように指示している。そうでないと、やはりどう考えても勝負にはならないからだ。はるなの誘いでやって来ていた加賀と赤城のF-4も例外ではなかった。

「不利だ！」加賀は不平を鳴らしていた。「手も足も出ねーじゃねーか！」

単純にして明快である。F-4はF-15より1t重く、エンジン推力は7tも低い。

「慌てるな、相手はハリアーだろうが」後席の赤城は落ち着いたものだ。「俺に任せろ。策がある」

「……本当だな？」

「安心しろ。こないだの中間の平均はいくつだ？俺は85だが」

「わかった」加賀はおとなしく従った。「わかったから、その話は無しだ」

告げられた方向へ全速で飛んだ永野が問題の艦隊を見つけるまでに、大した時間はかからなかった。全部で5隻というところまではわかったが、何が何隻いるのかまでは永野にはよくわからない。それが普通なのであって、水平線上の目標の艦級をズバリ言い当てる榛名は異例の部類に入るのである。そのために、偵察／哨戒用の機体は「目標編成表示機」が備えられている。その時見つけた部隊の内容の概略だけをディスプレイに表示するものである。狭苦しいS-2の操縦室の右後に陣取っていたシミュレーションゲーム同好会の当番は、すでにそれを操作していた。

「先輩、ミサイル巡洋艦1隻、駆逐艦2隻、フリゲート艦2隻です」

まったく無感情に彼女は告げた。その口調が永野はたまらなく嫌だった。榛名と交換日記を交わし始めてからというもの、周囲の風当たりが強く冷たく感じられるようになってきていた。どこが悪いのか、と永野は思う。人を好きになるのは誰でも当たり前のことではないか。自分の場合はそれがたまたま榛名だっただけのことである。誰からもそれを非難されるいわれはない。——しかし普段は内気な彼女は、いつも黙っているのだった。女子校の中でのこと、他でも似たような噂は常時たっていたから、それでもなんとか過ごすことができたのである。このてのことは相手にすればするほどエスカレートするということを、彼女自身が知っていた。ただ、榛名も知らないことだったが、宇垣の一派が気をきかせて裏から手を回してサポートしてもいた。

だから永野は無言のままで注意深く件の艦隊に近接し、周回しながら観察を始めた。一番大きな艦を中心に、駆逐艦と覚しき中型艦が2隻、横並びで前方に位置している。後方には同様にフリゲート艦が2隻並んでいた。それぞれの間隔はかなり狭い。何もしてこないところを見ると、どうやら艦隊側も永野たちの出方を見ているようだった。やがて永野は、大型艦が榛名から聞いた「ベルナップ」級というアメリカ海軍のミサイル巡洋艦の艦型に似ていることを思いだした。連鎖的に駆逐艦が「フォレスト・シャーマン」級、フリゲート艦は「ガルシア」級に似ている、と気付く。

このあたりは「公海」で、どちらも下手に手を出すわけにはいかない。とくにS-2はもともとの搭載量が少ないので、やたらにケンカを売るわけにはいかなかった。どうすれば良いか、永野は考えた。……結論はすぐ出た。

「先輩と相談しなくちゃ」

彼女は喜々として、無線機を入れた。

空戦は高度6000mで再開された。はるなたち5機がまた大きく回り込みながらハリアーの後ろへつけようとする。アフターバーナー無しでもF-15の加速力はハリアーの比ではない。またすぐに終わるのか、とはるなは諦めた。欲求不満が爆発しかけた。

不満は爆発しなかった。かえって収縮した。

ハリアーが全機、群れを成したままで急降下に入ったのである。

「？」

何をいまさら、というおごりも手伝ってか、はるなたちは何も考えずに後を追って急降下した。

レーダーに映る6機のハリアーを表わす輝点を目で追ううち、赤城はふとあることに気がついた。加賀もレーダーは見ていなかったが何か虫の知らせを感じとり、赤城が何か言いかける前に降下を中止して引き起こしに入った。

「危ねえ……」高度4000mで水平飛行に戻し、加賀は深く息をついた。「も一少しじはまるところだった……」

(ACT. 6 続)

